



1 開会・趣旨説明

■開会挨拶（芝浦工業大学学長 村上雅人）

本学は、平成 25 年、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択され、大学としてまちづくりに関連したプロジェクトを立ち上げました。大学は地域とともに発展すべきというのが私の持論であり、大学は地域の中でより輝きを増すとも思っております。本日のシンポジウムでは、この分野で日本を代表される研究者である早稲田大学の佐藤滋先生に基調講演をお願いいたしました。

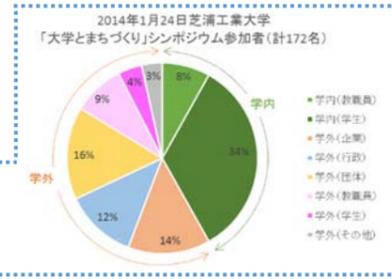
シンポジウムを機会に、今後ますます大学と地域の連携が進むことを祈念いたしまして、開会挨拶とさせていただきます。

■趣旨説明（芝浦工業大学大学院理工学研究科特任教授 古川修）

本学は、創立以来「地域とともに生き、地域とともに学生を育てる」ことを基本理念に掲げ、地域との連携に重きを置いてきました。大学 COC 事業を通じ、地域との連携を更に強化して「まちづくり」と「ものづくり」に関する課題解決およびその過程を通じた人材育成を行ってまいります。そのために、地域志向を踏まえた教育・研究・社会貢献の三位一体的な改革を推進してまいります。

【コラム：シンポジウムにはどんな人が来たの？】

本シンポジウムでは、学内外 172 名の方にご参加いただきました。学外では、企業・自治体・まちづくり団体・教職員・学生など、多様な方々にご参加いただき、まちづくり分野のすそ野の広さを感じられます。



2 基調講演「まちづくりの拠点としての大学」（早稲田大学理工学術院教授 佐藤滋）



■ポイント

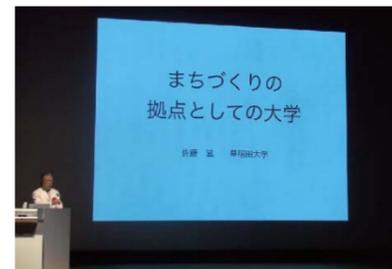
- 「まちづくりの拠点としての大学」は、社会のあり方を変えていくような意味を持ち得る
 - 市民まちづくりには3つの世代があるが、その中で大学のかかわり方も変化してきた
 - まちなかに拠点を持つことで、大学の本気が伝わり、地域の信頼につながっていく
 - 地域社会の運営がまちづくりのターゲットになる中、コモンズとしての大学が期待される
- ※コモンズ：入会地など自治的な管理が行われる共有の場、地域資源やコミュニティについての概念として応用されている

まちづくりの拠点としての大学ですが、実践的な意味だけではなく、社会のあり方を変えていくような意味を持っていると思います。私自身、「まちづくりとは、地域社会に存在する資源を基礎とし、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、『生活の質の向上』を実現するための一連の持続的な活動である」と定義しており、さらに限定的に 10 の原則を定めています。

1970 年代に、大学や社会に対する問題提起があって、それらを通してまちづくりを実現してこうという時代がありました。これは「まちづくりの第一世代」と私は呼んでいます、理念や方法が大事で、例えば参加、分権、まちづくりは民主主義といったものでした。しかし、この理念はなかなか重く、具体的な成果が上がってこなかったと思います。第二世代は、80 年代の後半から 90 年代の初めで、「テーマと実験の第二世代」と呼んでいます。市民、地域を巻き込み、ワークショップや参加のデザインの技術など、まちづくりがツツと沸き上がる時期でありました。ただ、第一世代が持っていた、理念で地域と本格的に関わっていくようなことができなかったと思います。第三世代は、本格的に地域の運営や、そういうものと関わっていく時代だと私は位置づけています。

私は山形県鶴岡市に行ったときに、住民の方に、「本気でやるなら拠点を一つつけてやったらどうか。早稲田大学、たまに来て何か偉そうなことを言っているんじゃないで、ちゃんとここにいてやってくださいよ」と言われました。そこで、小さな空き店舗を借りて、コアラ(Community Architecture Laboratory)という店を拠点に 90 年代の後半から活動を始めました。コアラという拠点を持っているということが、この人たちは本気がかかわってくれるという地域の人たちからの信頼が生まれ、地域と大学の相互作用が生まれました。

私は、こういうことを通して、第三世代のまちづくりの展開として、地域社会を運営していくことがまちづくりのターゲットになってくるのではないかと思います。地域社会で支え合うための仕組みを整備することが必要になり、多様な主体をつくり上げていく場として、コモンズの再形成が必要で、大学もそういう場になってくるのだと思います。また、まちづくりのプロセスや展開を社会に対し公開し、それを共有・可視化し、正当性を担保していくことが求められているのだと思います。



まちづくりの 10 の原則

- 1) 公共の福祉の原則
- 2) 地域性の原則
- 3) ボトムアップの原則
- 4) 場所の文脈の原則
- 5) 多主体による協働の原則
- 6) 持続可能性、地域内循環の原則
- 7) 相互編集の原則
- 8) 個の啓発と創発性の原則
- 9) 環境共生の原則
- 10) グローカルの原則

3 芝浦工業大学まちづくり系プロジェクトにおける取り組み

■内部河川・運河の活用とコミュニティ強化プロジェクト 代表:志村秀明[工学部建築学科]

●プロジェクトの狙い

アメニティと景観の向上、都市環境の改善、観光振興、災害時対応などのために、江東内部河川・運河の活用を促進し、併せて、都心の地域コミュニティを強化します。一方で、過疎化が進行している中山間地域の資源を維持するために、産業育成といった集落活動を支援します。

対象地区は、東京都江東区・中央区・港区と福島県南会津町です。

また、公共施設再編のための市民参加支援をさいたま市において開始しています。

●主な取り組み概要

【内部河川・運河の活用社会実験】【江東運河の水質調査】【コミュニティ強化支援 中央区月島地区】【南会津町のコミュニティ再生】



■芝浦アーバンデザイン・スクールプロジェクト 代表:前田英寿[デザイン工学部デザイン工学科]

●プロジェクトの狙い

芝浦アーバンデザイン・スクールは大学と地域が連携して都市の魅力再発見・再検討するプロジェクトです。環境保全、安全安心、持続経済など都市のあり方と建築の意味が改めて問われています。教育、研究、社会貢献の3つの学びを通して建築、都市、地域の未来を探ります。学内外国内外に開かれた場になるようにまちづくりの国際用語アーバンデザイン Urban design を用いています。2013 年度から東京都港区と連携して本学開設の地でもある芝浦・海岸地区を活動してきました。この地区は都心と港湾の間にあって運河を介して新旧が混在する独特の境界です。

●主な取り組み概要

【港区文化財旧協働会館の保全活用】【地域の建築都市調査】【公開講座と出展】【国際ワークショップ】



■まちづくりコラボレーションさいたまプロジェクト 代表:中村仁[システム理工学部環境システム学科]

●プロジェクトの狙い

大宮キャンパスに近い上尾市の団地内の空き店舗を活用し、地域活動の拠点となるサテライトラボを開設し、学生のフレッシュな知恵と行動力で、地域の課題(=超高齢化に対応した都市環境の形成、地域の安全性の向上、低負荷環境の創出、経済力維持・向上など)の解決の糸口を切り開いていきます。さいたま市見沼区、大宮駅周辺エリアなどでも、地域の関係団体や行政機関などとコラボレーションした活動を展開し、地域の課題解決に貢献していきます。

●主な取り組み概要

【サテライトラボ上尾を拠点とした活動】【原市団地とその周辺地域でのサービス・ラーニングの実践】

【大宮駅東口周辺地域でのサービス・ラーニングの実践】



■東京湾岸域における交通・都市プロジェクトの未解決計画を対象とした産官学共同 PBL プロジェクト 代表:岩倉成志[工学部土木工学科]

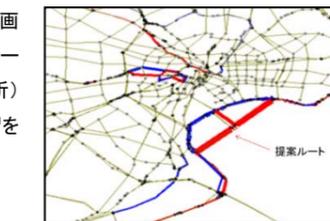
●プロジェクトの狙い

東京湾岸域において、官公庁や企業が構想・調査を行っているものの計画決定に至っていない難プロジェクトに、学生ならではの斬新な発想でソリューションを提案します。ディスカッションと分析(交通需要予測や費用便益分析)を行いながら、実プロジェクトと同様の検討ステップで実践します。この演習を経て、学生は問題理解力や解決力、組織的行動力を伸ばしていきます。

●主な取り組み概要

【江東区南北連絡 BRT 導入計画】【墨田・江東水辺整備計画】

【日本橋 1 丁目地区の都市再生計画】【成田空港へのアクセス鉄道計画】【首都高速第二湾岸線の整備計画】



4 パネルディスカッション「まちづくりの実践と教育プログラム」

■ポイント

- ①社会の難しい課題に挑戦していく姿勢が大切で、成果を挙げることを第一としない
- ②プロジェクト・ベースド・ラーニングで、基礎的な学力に加えて、プレゼンテーション能力・創造力・突破力を鍛える
- ③市民から気づきを得る(長く住んでいる人だから知っていること、論理だけでは通じない社会の難しさ、など)
- ④3つのキャンパスがあるので、様々な都市・地域の課題に触れられるようにする
- ⑤都心に位置するので、民間企業や官公庁と連携しやすく、またグローバルにも展開しやすく、そこから新たな価値をつくり出していく
- ⑥コンパクトな大学規模を生かして、各学科の教員が連携すると共に、学生の対応力や発想力の幅を広げる
- ⑦本学は、地域のパートナーの一員となり、地域の信頼を得ると共に、地域を本気にさせる

■メンバー紹介

司会	志村秀明 (芝浦工業大学工学部建築学科教授)
パネリスト	桑田 仁 (芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科准教授)
	作山 康 (芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科教授)
	岩倉成志 (芝浦工業大学工学部土木工学科教授)
コメンテーター	佐藤 滋 (早稲田大学理工学術院教授、早稲田大学都市・地域研究所所長)

●芝浦工業大学のまちづくり教育プログラムとは、また重視すべきことは？要点は？

桑田: 校舎の立地している都市的な背景の違いを教育に絡めていくことが大事だと思います。地域の距離に近い学科、政策的な提言に近い学科のいいところを組み合わせることが大切です。国際交流など、海外の学生、研究者と意見を交換することは学生にとっても刺激になります。多様な主体に理解してもらったり、意見をもらって気づきを得ることが大事だと思います。

志村: 芝浦工業大学は他の大学と比べるとコンパクトな方なんです。まちづくりだけでなく、他の分野の先生ともコンタクトをとって連携しやすいという特徴があると思います。

●コメンテーターより

佐藤: 全学が拠点を押えて継続的に進めていくことはうらやましく思います。日本の地域社会ってものすごくレベルが高く、本当の対等のパートナーでやっていけるようなことがあると思います。ぜひ、こういう取り組みを国際的な場で広めてほしいです。もう一つは、地域社会が本気になるかどうかということですね、お互いリスクを負いながら。そのところで、出てくるもの大ききさというのはすごいと思いますね。そういう関係ができたときに次の段階に行けるのではないかと感じます。

●各プロジェクトの今後の予定・課題、大学にとっての課題・目指すべきもの

作山: 実務的な教育を受け地域に入ると、やはり批判が入ります。最後の選択は地域だし、単なる理想論だけが通用するわけではないということが、こういう現場を通じてわかってきました。そういうことを芝浦は早くからやっていたし、これからもできるんだということで、「地(知)の拠点整備事業」の展開を非常に楽しみにしております。

岩倉: 地域が本気になるかということでお話ししたいと思いますが、日本橋室町の開発で、行政が普通の茶色い舗装でしようとしたときに、うちの研究室の学生が抵抗しまして、石畳の通りにしたんです。学生は提案しただけではなくて、中央区にかけ合って、費用が必要ですから、地元住民の人にも寄附をいただいて、三越であるとか三井不動産にかけ合って、というようなことをやって、その道から今のコレド室町の石畳のまちにつながっています。地域の人を本気にさせるときに、提案だけじゃない、その先でも学生がアプローチしていくというのが、地域の人たちが本気になるポイントなのかなと思った次第です。

●まとめ

志村: プロジェクトを通じて課題を捉えて解決していく、突破力、創造力、プレゼン力といったところを勉強していかなければいけないと思います。各プロジェクト、それぞれ性格が違いますし、まちの状況も違いますし、教員の分野も違いがあって、だからこういうプロジェクトが進んでいくと、もっと学科間が横断的になって良い教育になるのかなと思いました。今日、会場には多くの大学以外の方々にお越しいただいてまして、自治体の方、NPOの方、コンサルタントの方、企業の方、市民の方など、本当に大学が地域のパートナー、一員になるということの改めて仕切り直しができただけなのかなと思います。



芝浦工業大学における サービス・ラーニングの可能性

実施報告書 概要版

2015年1月24日(土)

時間 14:00~16:30(13:30開場) / 参加費無料
場所 芝浦工業大学豊洲キャンパス 交流棟6階 大講義室

【シンポジウム・プログラム】14:00~16:30

- 1 開会・趣旨説明
- 2 基調講演「まちづくりの拠点としての大学」
佐藤滋氏(早稲田大学理工学術院教授、早稲田大学都市・地域研究所所長)
- 3 今年度COCプロジェクトの取り組み
志村秀明、前田英寿、中村仁、岩倉成志(芝浦工業大学)
- 4 パネルディスカッション「まちづくりの実践と教育プログラム」
司会: 志村秀明(芝浦工業大学)
パネリスト: 桑田仁、作山康、岩倉成志(芝浦工業大学)
コメンテーター: 佐藤滋氏(前掲)
- 5 閉会
- 6 懇親会 17:00~(交流棟2階生協カフェテリア / 会費2,000円)

[主催] 芝浦工業大学 [後援] 江東区 / 港区 / 埼玉市 / さいたま市
[連絡先] 芝浦工業大学複合領域産学官民連携推進本部・地域共創センター
Tel. 03-5859-7180 / E-mail: sangaku@ow.shibaura-it.ac.jp

実施概要

芝浦工業大学は、東京ベイエリアである豊洲や芝浦、東日本の玄関口である大宮という特徴的な地域にキャンパスが立地し、各地域で教員や学生がまちづくりに関わっています。平成25年度には文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択され、より一層、地域志向の教育・研究・社会貢献のあり方を模索している所です。そこで、各キャンパスが合同で、これら地域に関わる多様な立場の皆さんと一緒にまちづくりを考える場を設けたいと思います。今回は、まちづくりと大学の可能性について広く考えるとともに、大学での学習と地域への貢献活動を組み合わせた教育・学習手法「サービス・ラーニング」について話し合いました。まちづくりに関する専門家、市民、NPO、自治体、企業など様々な方にご参加いただきました。

【サービスラーニングとは】

「サービス・ラーニング」は、「大学での学習と地域への貢献活動を組み合わせた教育・学習方法」と一般的に言われており、米国の大学や高校で取り組まれている教育プログラムです。ハーバード大学といった一流大学から小さなコミュニティカレッジまで幅広く実践されており、様々な地域の課題に取り組んでいます。取り組み方は様々で、ボランティア活動や社会活動、建築活動や設計演習などがあります。今回、「サービス・ラーニング」をタイトルに付けたのは、必ずしも成果を出さなければならないのではなく、社会の難しい課題に挑戦していく姿勢が大切ということを再確認するためです。

